



【愛の友協会後援会長賞】

とみた けいいち
富田 圭一

父さん、今年は喪中の案内がたくさん来ました。
知人の親御さんだったり、親しかった友人だったり、人の運命とはいえ
訃報に接すると物思いに沈みます。

そんな折思い出すのは、亡くなる前の父さんに最後に会った時のことです。
入院中だった父さんがもう長くはないとの報せを受けて、僕は新幹線を
乗り継ぎ父さんの病室に駆けつけたのです。

頬がこけた父さんは、落ち窪んだ目を閉じてベッドに横たわっていました。
「もうなにも分からないんだよ」母さんが言いました。

変わり果てた父さんに僕は大きな声で呼びかけました、
「父さん、父さん、父さん」

すると父さんの喉仏がごくりというように動いたのです。

そして唇をわずかに開き、なにか分からない短い言葉をつぶやいたのです。
「分かるんだ。兄ちゃんのことを分かるんだ。名前を呼んでいるんだよ」
妹が言いました。

でもそれが父さんが奇跡的に見せた最後の反応でした。

一週間後に父さんは天国に召され、あきらめと悲しみの中に
僕らは父さんの安らかな顔を見送りました。

父さん、あれから僕は一つと後悔をしているのです。


あのとき、ほんの一瞬にせよ父さんの意識が戻ってきていたのなら、
どうして僕は感謝の言葉を言わなかったのだろう。

たった一言、「ありがとう」ですんだじゃないか。

取り返しのつかないミスでした。父さん、ごめんなさい。

そちらで再会するときは、精一杯親孝行をするつもりです。

それまでどうか健やかに過ごしてください。



(兵庫県／79歳／無職)